
ジョルジュ・ド・ラ・トゥール作《いかさま師》と《女占い師》への一考察
—カラヴァッジョ作への挑戦という視座より—

十七世紀前半、フランスはロレーヌ地方で活躍した画家ジョルジュ・ド・ラ・トゥール(1593-1652)の画業は、闇のなかに聖人などが描かれた敬虔な雰囲気を通称「夜の絵」と、自然光のもとに世俗的な情景が展開される「昼の絵」に大別することができよう。後者の代表作として、本発表で取り上げる《クラブのエースを持ついかさま師》(キンベル美術館)と、その別ヴァージョンとされる《ダイヤのエースを持ついかさま師》(ルーヴル美術館)、それに《女占い師》(メトロポリタン美術館)があげられるが、それらの作品が成立した環境や制作の経緯について多くは不詳のままである。

以上の絵をめぐる二つの主題は、カード賭博やジプシーの占いの危うさによる世俗的な教訓や、聖書の「放蕩息子」の説話を下敷として成立したと考えられてきた。同時に、イタリアの画家カラヴァッジョにより十六世紀末に描かれた先行的作品、《いかさま師》(キンベル美術館)と《女占い師》(カピトリノー美術館)は当時からよく知られ、その後、彼の影響下でマンフレディ、ヴァランタン・ド・ブローニュー、ファン・ホントホルストなどといったカラヴァッジョ派の画家たちが、繰り返し取り組んだ題材であった。

発表では、これらをラ・トゥール作品の着想源として指摘してきた先行研究を踏まえつつ、今まで看過されてきた画中の衣装など細部の詳細な分析を通して、ラ・トゥールは、もとはローマのデル・モンテ枢機卿が所有していたカラヴァッジョの両作を、一対として認識し、参考にした可能性を指摘し、それを最も直接的な着想源として特定する。あわせて、基準となるラ・トゥールの《女占い師》の制作年代に関しても、パリゼの提案した1620~33年頃、コニスビーの1630~34年頃、チュイリエの1635~38年頃などの幅広い仮説のなかから、最も遅いチュイリエの説に妥当性があることを確認する。

この時期、画家の郷里のロレーヌ公国は、三十年戦争を機に侵攻してきた隣国のフランス王国の支配を受けるようになり、ラ・トゥールは新たなるパトロンとして、フランス側を強く意識していたと考えられる。十六世紀末のカラヴァッジョの作品のほうは、ローマにおける「プリミエラ(仏: プリム)」などのカードゲームの流行や、演劇などの文化に根ざして描かれたことが論じられてきたが、十七世紀のパリのフランス宮廷の周辺でも、これとよく似た文化的状況があったことを検証し、ラ・トゥールが再びこの主題に取り組んだ動機を推察する。

最後に、今までの先行作品には無く、ラ・トゥールが新たに自作に加えた、ゲームの勝敗や、衣装に関する創意と工夫を浮かび上がらせることにより、それが作品にいくつかの解釈上の「両義性」を与えていることを明らかにする。さらに、この「両義性」こそが、画家の芸術の本質をなし、一見断絶しているかにみえる「昼の絵」と「夜の絵」の両界につながりを与える鍵となることを提示したい。